幼児の教育　昭和62年12月1日発行（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第三種郵便物認可　第86巻　第12号

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1987 12

お茶の水女子大
昭和
63.2.15
附属図書館

第 86 巻　第 12 号　日本幼稚園協会

記念の本づくりをなさいませんか。

自費出版のご案内

手間のかかる作業は、お手伝いいたします。

1. 本の内容は　自叙伝、童話集、絵本、園の記念誌、研究集録、随想集、作品集など、ご随意に。

2. 製作部数は　1,000部以上がお得です。

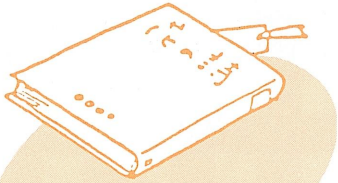
3. 製作期間は　原稿頂戴から完成まで、約3か月見てください。

4. 本の大きさや体載は……大きさはB6判、B5判、A5判など。製本は、上製本から並製本カバーつきまで各種あります。お好みのままに。また表紙などはご希望のセンスを尊重してご相談に応じます。

5. 本文は　原稿用紙に書かれたものでも、テープに吹きこまれたものでも、結構です。綺麗でわかりやすい組み方にいたします。

6. 絵や写真は　もちろん結構です。カラーのご相談にも応じます。

●内容、装幀、部数など思いどおりになる自費出版。手間のかかる編集作業は、キンダーブックや優良保育図書、雑誌などを手がけてきたプロの編集者がすべてお手伝いします。
●お気軽にご相談ください。
●完成したご本については、小社の宣伝ルートを通じて全国にご紹介いたします。

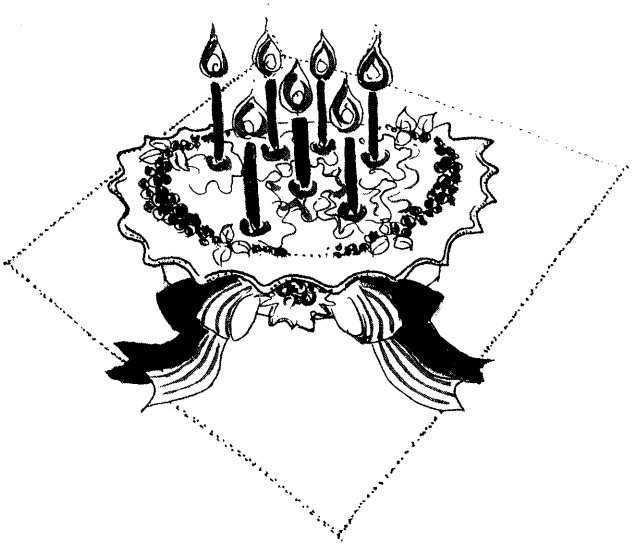


契約から納入まで
60～90日ぐらい
見ていただきます。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

記念の本づくり係　〒101　東京都千代田区神田小川町3-1
TEL 03－292－7788
（ご連絡はお近くの小社代理店・事業所にどうぞ）

幼児の教育



第八十六巻　　第十二号

幼児の教育　目次

——第八十六巻　第十二号——

子どもが成長する一日……津守　真…（4）

SF的読み解き　子どもという風景

第三十二回　悲しの現象学……堀内　守…（9）

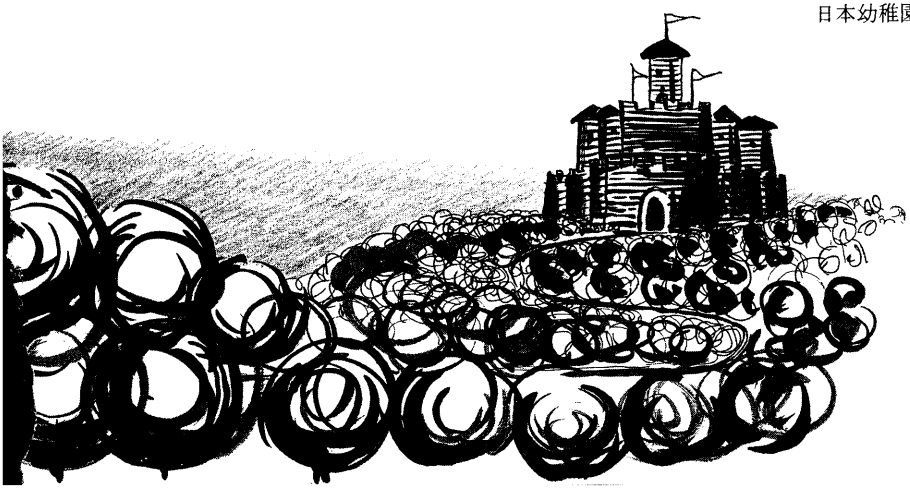
ふくろうのつぶやき

——人生も一つのストーリー——……真壁　伍郎…（19）

クリスマスと子ども……関　史子…（30）

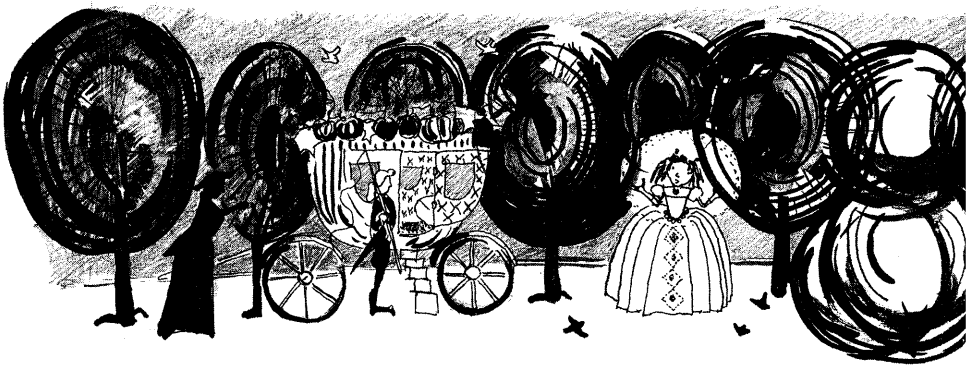
© 1987

日本幼稚園協会



中国のむかし話
「王子アーッゥと青梨（チンカア）のたね」……近藤伊津子…（37）
子どもの会話（その四）……無藤　隆…（44）
保育における受容の問題……山手　法子…（50）
幼児の教育　第八十六巻（昭和六十二年）　総目録……（60）

カット・福田　理恵
編集部・小澤　誉子
土屋真美子



子どもが成長する一日

津守　真

一、

保育室から庭に出たところに、私はひとりの子どもの手をひいて立っていたとき、ふと気がつくと、後からA夫が私の手にさわっていた。

母親の膝からおりて、奥の部屋から保育室を横切って、庭の出口までひとりで出てきたのだった。その日、A夫は、ひとりで部屋の中を歩きまわり、隅の槽の上に登り、その後を歩くなど、いつもだと母親と私の手をひいてしか行かない場所を、ひとりで手を振って歩いた。

A夫が私の手にさわっていたとき、私がそれに気が付いて驚いたのは、A夫のその行為の中に、この子どもの心の思いがこめられているのを見たからであった。自分で独力で歩

きたいという日頃の思いは、この日のいろいろの条件に支えられて、この意志的な行為となった。

庭に出てゆく私のあとを追って、母親の膝からおりて部屋を横切って歩いてきたとき、A夫はこれをひとりで敢えてしたのだった。私はその気持を受けとめた。思い切ってそうした子どもの気持に気付けば、それを受けとめるのはあたりまえであろうが、しばしば子どもたちの中での忙しさに追われて、傍に寄ってきた子どもの思いに気付かないことがあるに違いないことを、私はこの日にあらためて考えさせられた。

A夫は、このあと、ひとりであちこちを歩きまわった。これは能動性をもって歩くという、長い間にわたってA夫自身が問いつづけてきたテーマである。この日、A夫が私のあとを追って思い切って歩くというひとつの行為の時がおとずれたとき、それがきっかけとなって、このテーマは展開した。

子どもは、刺激—反応の鎖のひとつではなく、自らの内なる課題をになって行為する存在である。保育者も、反応を期待して刺激を与えるひとつの点ではなく、他者と自分の存在の本質に接して現実に生きる存在である。子どもの内なる課題に気付き、それにこたえて行為するとき、大人と子どもとの関係は創造的に変容しはじめる。私が床にひっくり返って、助けて—というとA夫は私の手をひき、そうしている間に、ひとりで彼方に自由に歩いてゆく。私にもA夫にも、一瞬先の未来は冒険と試みであるけれども、存在の本質にふれつつ、前途は着実に開かれてゆく。保育の一日の歩みはこうして進められる。

二、

朝、M夫が門から入ってきたとき、庭の途中で母親にまつわり、何かだだをこねている様子だった。私はそれに気付いていたのだが、傍で私を頼りにしている子どもから離れられず、M夫とつき合いの深いF先生を見つけたので、そのことを告げた。

その次に私がM夫と出合ったのは、しばらく後に彼が三輪車に乗って、F先生と声を上げて庭を走っているところだった。その日、保育が終ってから、どのようにしてM夫は元気になったのかをたずねた。

入ろうか、出ようかといつも迷いの中にあり、デリケートで、いまにもこわれそうなM夫とつき合ってF先生は一日を過したという。元気にしていると見えたのは、見えないところで保育者に支えられている子どもの一側面である。その子の本質をあらわにしているような遊びも、そのような保育者との関係の中に生れる。午後になって、ホールのトランポリンで、リズミカルにとんでは小刻みに足踏みをし、自分で倒れるのをくり返しているM夫を見て、私はその動きに合わせてリズムを口ずさんだ。M夫はまたそれに合わせて何度も自分で転んでは起き上る遊びをくり返した。他の子どもに倒されるのは我慢がならず、そのくらいならば、自分から先に転んでしまう。倒されても自分から起き上るというこの子どものテーマである。そのテーマをM夫はたのしんでためしている。

弁当のとき、音楽が響くと、耳に手をあて食べるのをやめてしまう。ようやく、トメテ

クダサイ、と小さな声で云う。おそれながら、しかし思い切って、M夫は表現する。帰るころには、トランポリンに他の子どもがのってきても、おそれずに、自分からその動きに合わせ、二人でとんでいた。

迷いの中にある子どもをうけとめられるのは、子どもの内なるテーマを承知して、その微妙な心の動きに沿って応答することのできる保育者である。それはただひとりの人に限られるのではないが、そのような人と一日を過すときに、子どもは安心して揺れ動き、成長への一歩を踏み出すことが可能になるのだろう。

M夫は、夏休みには、ああでもない、こうでもないとだだをこねることが多かったという。だだをこねるというのは、出ようか入ろうかとの心の動揺があることだろう。ねまきに着がえるのがいやで、赤ちゃんのときの小さなパジャマを着ると云い、一度着ると、こんどは脱がないとがんばるのだという。成長の前進をしようか、するまいかと揺れ動く心がここにもある。

後退と前進をくり返しながら、ほんの少しずつ、子どもは前進する。子どもの心の内なるテーマを理解する保育者との関係の中で、子どもは成長する。

三、

保育者は、子どもの行為に驚ろかされたり、困惑させられたりする。そこで気付かされる子どもの行為は、「ひとりで歩いてきて」とか、「母親にまつわり、だだをこね」とか記

述することができる。更に、子どもはどのように感じてそれをしているのかを、大人は見てとることが出来るし、それを記述することも可能である。子どもは「敢えて」、「思い切って」「意志をもって」誇らしくそれをしたのであり、また「迷いつつ」「おそれながら、しかし思い切って」それをしたのである。

ひとつの行為には、それをする子どもに共通の意味と、その特定の子どもの、その場面の独自の意味との両方がある。両者を考えて、その子どもの行為の本質に近づき、大人が応答するとき、子どもは自分自身の内なる課題と、取り組むことができる。その大人との間で、子どもは安心してひとりで歩きまわることを試み、また、自分で転んでは起き上る遊びをくり返す。

こうして、保育の場は、子どもが成長する一日となる。

(注) ここに記したA夫とM夫は、津守　真「子どもの世界をどう見るか」NHKブックスのP134とP137に記されている。そのつづきである。

（愛育養護学校）

SF的読み解き
子どもという風景

第三十二回　悲しの現象学

堀内　守

悲しいとは

「悲しい」とは大変高度な感情のようでもあり、また非常に単純な感情のようでもあるように見えます。

単純な――と言えそうなのは、日常出あうありふれた例がおのずから物語ってくれます。朝、どこかの家の子が泣いています。小さな子らしい。眠りから醒めたばかりで、気分がよくないからか。ころんで痛かったからか。おなかが空いたからか。

理由が一つ挙げられそう。原因が一つだと特定できる。だから「単純」に見えるのですね。

だが、日常場面で、これらとはちょっと様相の違うこともありましょう。自分の言いたいことをうまく表現できないが故に、顔をまっ赤にしてジダンダを踏んだり、地面をコロゲまわったりしている子もいます。まわりのオトナたちは、ただオロオロするばかりですが、あのジダンダは、「自分が言いたいことをオトナはわかってく

れない」という外へ向かっているヴェクトルと、「うまく表現できない自身のフガイナサ」という方向で、オノレに向かっていることは、ちょっと冷静に見守っていればわかってきましょう。

ただ、スパッとわかるとはいえません。「見守る」といっても、当方も生ま身の人間であってみれば、あの子のジダンダとまわりのオトナのオロオロにまき込まれますから、オドロキ、いぶかり、見つめ、そして、時をかけて了解していかざるをえないという回り路をとらざるをえません。

回り路を通っていく。そのおかげで、当方も、記憶のプールのなかから、あれこれ心当りのデータを引き出し、眼前の事態と照合します。その過程で、「あ、この子はきっと、こんなこと、あんなこと、そんなことによってジダンダを踏んでいるのだな」と解釈するのです。

あの子の場合、当事者ですから、全身全霊が煮えたぎります。しかし、見守るわれわれの方は、必ずしも煮えたぎらない。もっとも、場合によっては子といっしょになって煮えたぎり、あらぬことを口走ることもありましょう。でも、そういう場合でも、いつまでもいつまでも煮えたぎっていることはない。

思うに、このようなことは、悲しみなる状態も実は言語と深いかかわりがあることを示しています。

涙

「涙」を例にとりましょう。

「ナミダ」は、一見きわめて自明なものです。涙腺からいつも少しずつ眼球をうるおしている液です。しかし、その「涙」は、悲しい時も出るのです。おかしいときも、うれしい時も「うれし泣き」で出ます。

生理学的なセツメイでは処理し切れぬモンダイが「ナミダ」にはいっぱい絡みついています。

先ほどの子は、ジダンダを踏み、汗を流し、ハナを垂らし、涙も流していました。泣く当人にとっては（やや理屈めいた表現で恐縮ですが）、涙は幾通りもの作用をしてくれています。第一は、代償的なはたらきです。涙

が出る。すると、判断停止がはじまり、また同時に浄化作用が発動します。ジダンダは、少しずつおさまり、自分が何のためにジダンダを踏んだか忘れさせてくれます。つまり、行動が抑制されます。

見ている側も、涙を見ると、少し同情する。極端な場合には「もらい泣き」をしたりする。

してみると、「涙」は、ある信号、ある意味発信をするというべきでしょう。「もうやめた」という意味だったり。「もう降参」という意味だったり。感情の共有を示すプラカードのごときものだったり。

こうなると、涙について論じることは、だんだん言語について論じることに近くなるわけです。少くとも、感覚と感情とはこの辺を手がかりにして区別すべきでしょう。感覚は、外界、もしくは体内から発せられた刺激を専用の器官で受けとめる生理的なシステムでしょうし、感情の方は言語に近く、言語そのものとはいえないが、言語のまわりに浮遊し、絡みついている。伝達内容も、感覚とくらべたらはるかに構造的です。

そういえば、涙が口に入ることもあります。塩っ辛い。これは意外に鮮明に記憶に残ります。なぜだかわかりません。だが、理論的なセツメイはできなくとも、体験が物語りを紡ぎ出します。「そういえばそうだった」という声があちこちから生まれてきそう。

悲しの言語

ジダンダを踏んでいた子も、涙をきっかけにして、ジダンダを踏まなくなります。

この面から見ていくと、泣くということは鎮静効果、浄化効果をもたらすようです。そして、それは、当初表現したいと思っていたことがしだいに形を整えてきて、余分なものが消去されていくのに似ています。ひとつの納得や了解が生まれてくる。だから、別の表現を使えば、これは高度なはたらきということになるでしょう。

悲しい状態にある時、ひとは悲しい歌をうたうか、それとも逆に、悲しい状態にある時は楽しい歌をうたうのか。こう問うてみると、事態はもっとはっきりしてきま

す。「涙」だの「悲しみ」だの、が歌詞のなかに多いとしても、その歌の誕生した場は、そう一対一の単純な対応はしていません。

ジダンダ

顔をまっ赤にし、汗を流してジダンダを踏む。このジダンダは奇妙なことばですが、「地団駄」とも「地団太」とも書きます。もとは「たたら」に発し、「たたら」とは足で踏んで空気を送る大きなフイゴです。

それはさておき、ジダンダを踏むと表現される行動は、よーく考えてみると、私たちを少しずつ別の世界に連れていってくれます。

第一に、子どもたちも、ジダンダというコトバや、ジダンダというシナリオを演じているわけではないということです。このように行動するのがジダンダである、との了解の上に立ってわめいているわけではない。まさに反対です。

第二に、なぜ怒りや悲しみに襲われたとき、地面を踏むのでしょうか。躍んだり、はねたりしてもよさそうなのに、地面を蹴る。

素朴なようですが、これは何かの儀式に似ています。ちょっと、リズムを加え、ちょっと加工すれば、踊りになるのでは？

戦意昂揚の踊り、呪術に似てきます。しぐさのひとつひとつはごく単純なものです。それをちょっと次元を変え、振りつけに置きかえれば、本当に踊りになりましょう。この場合の「次元を変え」とは、たとえば紙の上に輪ゴムを貼りつけておいた状態から輪ゴムをはがし、ひっぱったり、丸めたり、空中で動かすほどの相違になります。

この「次元を変え」るには、どうしても言語を介在させなければ不可能です。

カナシミが「悲しみ」として表現されたとたん、カナシミの混沌とした世界はメリハリをつけられ、「悲哀」「愛し」「悲劇」などの物語に構造化されます。すると、ジダンダは不要になります。

時によっては、ジダンダは洗練された様式にまで統合されていくのです。

腰をかがめて

小さな子どもが母親を呼ぶ場合を例にとりましょう。近くの場合は、ふつうの声で呼んでいます。距離が遠くなる。けれども母親の姿が見えている。そういうとき、子どもは頭をあげ、呼びながらだんだんとからだを曲げていきます。前へ上半身を曲げる。

この意味するところは何でしょうか。

まるでことばを遠くまで投げてやろうとするかのように、「おか、あ、さーん」などという発声のしかたになります。収集した例のなかには、何回もそうやっているうちに、「おかあさーん、たら」「おかあさーん、んー」と伸びている例もあります。この語尾がつくのは、当のおかあさんにことばが届かず、呼んでいる子どもの方もそろそろあきらめ出している段階のようです。

両手をメガホンのようにして呼ぶのは、こんな段階よりもっと進んだ段階のように思えます。

まずからだ全体を曲げる。ついで、かなりあとになって両手をメガホンのように使い出すと見当をつけておきます。すると、こんな平凡なことでも、かなりの意味をもって迫ってきます。

呼んでいたはずの母が姿を消してしまった。もう、呼んでも仕方ない。こんなことが当の子どもに納得されるのは、何度か右のようなしぐさをやって疲れてからです。まわりにだれもいない場合はそれで一段落です。

ところが多少なりとも知っている人が彼のまわりにいますと、そう簡単に納得しません。

まわりに他者がいると、彼の悲しみは消えないで残るようです。のみならず、少し慰めのことばでもかけられようなものなら、悲しみは増幅するようで、あらためて泣き出したりするのが見られます。

他者への訴え

このようなことから「悲しみ」の構造を少していね

いに見ることができましょう。

「悲しみ」は、その「悲しみ」を誘発した事態から生ずる。もしそのように考えるとしたら、常識には合致するように見えますが、それよりも、「悲しみ」は、それを自分といっしょに受けとめてくれる可能性のある他人がそこにいてくれることで、いかにも「悲しみ」に相当するような構造をもつようになるといったらよいでしょう。

他人の存在によって「悲しみ」は、より人間的な感情になるのです。すなわち訴える相手がいると、「悲しみ」は単なる感情のレベルから訴えのレベルに組み替えられる。そのとき、当の母親が戻ってこようものなら、「悲しみ」はさらに増し、同時に訴えの質は高まりますから、「悲しみ」と「安堵」が融合していきます。

原理上は、事態は旧状に復したのです。にもかかわらず、現象としては以上のべたように、事態をさまざまな関係のなかでこねまわします。

そのあげく、その過程にあっては新しい集団形成がなされたと解されましょう。集団形成の大事な要素として涙の儀式化が行われたと表現してもよい、といったら大げさにひびくでしょうか。

母親が姿を消した。子どもが泣いた。

そこへ知り合いの人が来て「なぜ泣いているの？」と呼びかけた。子どもは急に大声で泣き出すはずです。すると、声をかけた人は、もういちど「ね、どうしたの？」というように声をかける可能性大です。このことばが、その子の「悲しみ」を増殖させ、よりリアルにすることは前にのべたとおりです。

ところへ、当の話題になるはずの母親が戻ってきた。「あ、おかあさんが帰ってきた。してみると、おかあさんが見えなかったから泣いていたのだね」というように、彼の泣いていた意味が起承転結よろしく語り出され、物語の構造に近くなる。

のみならず、母親の方も「いま帰ったからね」と応じ、近所の人には「ありがとうございます。ちょっと、そこまで用事があって行っていたものですから」などと

応ずる。このやりとりのことごとくが当の子どもの「悲しみ」を新たにリアルなものに仕立てるわけです。

これは人間世界に見られるふしぎな現象といっても過言ではありません。たとえていえば、独身者がひとりで個室に入っていてお金をかんじょうしているのと、お店へ出かけていって店の人と何かを言い合いながら必要な商品を求めてくることとの違いに相当します。

「おかあさんが帰ってきたから泣かなくてもいいじゃないの」と声をかけられても、事はそうかんたんにおさまりません。おさまらないのがあたりまえです。「この時間に自分がどんなに悲しかったか、あらためて訴えたいくらい」というのがホンネになるでしょうから。それなのに、母親のことばはいかにも散文的です。いや、かりに「おお、よし、よし」などと理解ありげな態度を示したところで、そうやすやすと問屋が卸しません。

問屋が卸す

問屋が卸さないという表現は比喩ですが、事の本質を

うまく言い当てていると思います。

ついでですが、感情にまつわる表現には何と商売にかかわる比喩や隠喩が多いことでしょうか。つまり、私たちのことばで言い直すとしたら、感情は言語に準じて構造化されているのですし、その構造化は他者とのやりとり（交渉）を通して洗練されていきます。このことはあまりにも当たりまえなので、あまりにも癒着し合っているものですから、あらためて指摘されると奇妙にひびくこともあるのですが、丹念に見てみると納得できます。

泣きじゃくるというのは、吸気がけいれん的になる状態をさします。

しゃっくりをしているのに近いのです。そういう場合は、悲しみが別の意味表現に移っていくきっかけを暗示しているようです。泣くリズムが変わってきます。そろそろことばがまじってきます。他人がいれば、それに対する訴えがはじまります。「アーン、アーン」とリズミカルに泣いていたのが、少しずつくずれていき、「アーン、アーン」がしゃっくりによってとだえがちになり、その間からことばが断続的に出てきます。

ＡＡＮ、ＥＥＮ、ＯＯＮ

アアン、エエン、オオン

文字表記になると、これらが主たる音声表記になります。ＩＩＮ、ＵＵＮがあってもいいような気もしますが、使われません。その代わりに、泣くことのみの修飾のことばは驚くべき数に達します。全身全霊で、「慟哭（どうこく）」するというような表現もあれば、「わあわあ」泣くという表現にいたるまで。しかし、これらの表現とても、泣いている当の状態にぴったりとはなかなかいえません。涙だってそうです。「ぽろぽろ」と流れる涙がある。かと思うと、「にじむ」涙もある。「枯れ果てた」涙もある。いずれも、言語による――今様のことばで表現すれば――「デジタル」な表現です。

ホントに泣くのは「アナログ」的であるはずですから、双方の間にはどうしてもズレが出てきます。とはいえ、やはり「アナログ」的なものは、いくら美しい詩で表現しようとしても完璧とは申せません。

子どもが大きくなっていく過程にあっては、いろいろな悲しみに当面するはずです。一時的な悲しみで、すぐに忘れ去られてしまうような悲しみもあります。また逆に、なかなか忘れようとしても忘れられないような悲しみもあるでしょう。その悲しみは、言語化されて、まとまった形に組み替えられてはじめて記憶されているのです。

実存的なカナシミ

子どもだって（いや、子どもだからこそ、といえる面もあるのですが）、実存的なかなしみを味わっています。ただ、おとなのように、しかるべく言語化できない。だからこそ表現を求めて、悶々としたり、その悶々が人間という存在につきまとうことを感得したりします。

生マレル前ノジブンハ、何ダッタノカ？

ジブンハ、コノ人タチノナカデドンナ位置ヲモツカ？ ダイジナ位置カ？ 余計ナ位置カ？ イナクッタッテカマワナイノカ？

元気ダッタおじいちゃん（おばあちゃん）ガトツゼン死ンダ。「死ヌ」トハドウイウコト？ ドウシテ帰ッテコナイ？

このような局面は、ある日ふと訪れる疑問です。答えるにはまだ経験や知識が足りないのですが、問いだけはきちんと立てられるのです。

ふうと訪れた疑問は、ふたたびふうと消えていきます。でも、またふうと訪れます。なぜこんなにちょいちょい訪れるのか。なぜ、こんなことが気になるのか。それなのに答えがなさそうな気のする問い。バカラシイようでいて、空々漠々とした問い。おとなら、ちゃんと「不条理」とか「空無」というような術語で答えたつもりになるのに子どもはひたすら身をもってその変な問いと格闘していく。

何だかおとなに訊いてはならぬ問いのようにも感じられる。秘め事として心の中であたためていなければならないような問い。

遊びにまぎらせ、忘れているのがいいような問い。オバケはいるのかな。異星人はいるのかな。宇宙人はいるのかな。

「いる」っていったい何だろう。

想像の世界で浮遊する。浮遊できるのはコトバが少ないからです。自分の体験している状況はいっぱしの複雑な姿をもっているのですが、それをまっとうな形で表現できないのです。でも、何となく、以上の問いは、通常の問いと違いますから、ウサンクサイのです。アヤシゲです。奇怪です。

問わなくてもすみそうな問いなのに、何だかジブンの心の深いところからユラユラと立ちのぼってくるようでもあり……。

底のない池のごとき心のイメージ。見なれている日ごろの姿とは異なるニンゲンのココロの奥底にわだかまるどろどろした、変なモノ。

神話や童話のなかに、ちらちらと見え隠れする何やら恐ろしきできごと。人殺し、残虐、ダマシ、悪。こんなにとんでもないできことにあふれているコワーイ世界。ああ。

でも、これらも心の大事な糧(かて)なのです。

そういえば「悪役」の何と多いことか。巨大な「悪役」が心のなかで転じて人気者になったり、「悪役」に弱点のあるのが発見できたりすることも、また結構なことなのです。

「結構」。そうです。それは、新しい筋立ての始まりでもあるのですから。

かくて悲しみはいろいろなものに投影されます。雨に、雲に、霧に、星に、川に、山に。

この段階の悲しみは、もはや悲しみを通り越し、甘く悲しいものに変化してしまっているはずです。

（名古屋大学）

ふくろうのつぶやき

――人生も一つのストーリー――

真壁伍郎

妻の勤めている幼稚園では、かれこれ十五年近くも貸出文庫を続けています。子どもたちに絵本を楽しんでもらいたいためです。そして、お母さんたちには、ご苦労でも、かならず読み聞かせをしてくださいとお願いし、その時の子どもの様子や、感じたことを、読書ノートに

しるしてもらっています。

わくわくする思いで、子どもが幼稚園から借りていった本が、家庭でどんなふうに楽しまれたか。それが、この読書ノートには、お母さんたちの心こもる筆でつづられています。先生もかならず目を通し、筆を入れていますので、親と教師でつづる、一人ひとりの子どもの成長の素晴らしい記録になっています。

ある日、ユカちゃんが借りていった本に、電話のことが出ていました。お母さんはユカちゃんと本を楽しんだあと、こういいました。

「ユカ、電話ないときどうだった」

この家には、少し前まで電話がなかったのです。するとユカちゃんの返事、

「電話がないときは、トン、トン、トン（家の階段をおりる音）、ポン、ポン（くつをはく音）、バタン（ドアの音）、トコ、トコ、トコ（歩いて）、ジージー、もしもし、さよなら、ガチャン、トコ、トコ、トコ（歩いて）、ただいま、おわり。電話のあるときは、トン、トン（階段おりて）、もしもし、さよなら、ガチャン、トン、トン（階段のぼる）、電話あるといい気持」

お母さんは、ユカちゃんのこの詩のような言葉を読書ノートに書きとめ、こうつけ加えました。

「はじめから物がそろっていると便利さなど、気づかないのでしょう。家には、車もありません。どこへ行くにも、まず歩き、出かけるにも、バスに乗ったり、汽車に乗ったり、なんとも不便な生活ですが、自然と荷物を持ってあげるとか、乗り物の中でのマナーとかが身につくようです。幼稚園までの距離も会話を楽しんだり、草笛、花などなど、自然とのふれあいも多く、あまり苦になりません。この一年も歩き通したいと思っています」

字が読めるのだから、あなたは一人で読みなさいだとか、読んでやりさえすればいいのだろうと、自分の時間だけを惜しんでいる親には、このユカちゃん親子の楽しさは分からないかもしれません。それに、親自身も本当の意味で自分の生活を振り返ることはないだろうと思い

ます。自分の時間を差し出すことによってしか得られないなにか大切なものが、親と子の交わりにはあるのです。

一冊の絵本を楽しみながら、親がどんなに自分の子どもを〈発見〉しているか。そして、自分を振り返っているか。お母さんたちがつづる「わが子の読書ノート」には、こうした驚きや発見が随所に見られます。自分から生まれた子だから、何もかも分かっているという思い込みが、どうしても母親にはあるのでしょう。これが、本を読んでもらって、そのお話に感動している子どもの姿に接したりすると、自分とは違ういのちがたしかに育っているという実感になり、自分のありようにまでそれがはね返ってきます。さらに、書くという作業がその気づきをいっそう確かなものにさせてくれます。

そんなわけで、読書ノート一冊を書くことによって、子どもと絵本と親の「間をおいた三角関係」が確認されるようになると、子どもが育つだけでなく、親もそれなりに、しっかりしなくちゃと思うようになるのでしょう。この幼稚園では、いつの間にかお母さんたちの読書会が始められるようになりました。

本当に絵本は、子どもを育てるだけでなく、親も育ててくれました。

ところで、幼稚園の頃、本を楽しんだ子が、その後どんな読書をしているか。この幼稚園のお母さんたちが、卒園生にアンケート調査をしてみました。

卒園して間もない子たちはまだそれでも本を楽しんでいました。まだ、お母さんたちも、「読み聞かせが大切よ」という幼稚園の先生の言葉を頭にとどめているのです。問題は、小学校三、四年生の頃から始まります。読む子と読まない子がだんだんはっきりしてきます。もうお母さんも、ほとんど本を読んでやりません。学校の勉強がむずかしくなってくる頃ですから、それどころではないようです。

この調査で面白いことが分かりました。幼稚園や小学校の低学年の頃、一晩では読み切れないような、いくら

か長めのお話を読んでもらっている子の方が、後々まで、読書を楽しんでいるということです、

なるほどなと思いました。言ってみれば、おあずけの味を知っているほうが、楽しみを持続できる。長いお話を、今日はここまでよ、といっておしまいにする。それには、聞くほうも、読んでやるほうも、それなりの我慢が要ったことでしょう。でも、それがあるからこそ、明日への期待をふくらますことができた、これからお話はどうなるのだろうかといろいろ想像をめぐらしながら、眠りにつく。幸せといって、これ以上の幸せはないのかもしれません。

本を読む楽しみは、端的に言ってこれではないでしょうか。先を期待するから、忍耐できる。いや、忍耐などではなく、自分なりの夢と想像をかりたてることができる。それによって、今という時を楽しむことができる。

教育の普及のおかげで、これだけ文字が読める人が多くなったのに、なぜ、学校教育の段階を終えてしまうと、多くの人は本を読まなくなるのか。ブルーノ・ベッテルハイムという学者はそれに疑問をもちました。そして、いろいろ調査した結果、彼の結論はこうでした。

文字が読めるように教育しているのは、ドアの把手の扱い方を教えているようなもの。しかし、そのドアを開けて、向こうの部屋に入っていこうとするかどうかは、別な問題だというのです。その部屋に面白いものがあると期待しなければ、興味を持たなければ、わたしたちは決して、ドアの把手に手を掛けて開けてみようとは思いません。

ドアの向こうに何があるのか、その興味を起こさせ、期待を呼び覚ましてくれるのは、誰かがそのことを語ってくれるからです。読み聞かせや語りは、その大切な役割を果たしてくれます。考えてみれば、大学の授業もこの読み聞かせや、語り以上のものではありません。教師の「語り」によって、学生たちは向こうにあるものへの思いや期待をかりたてられ、一生懸命に本のページをめくり、実験に精を出すことになります。であればこそ、

その「語り」が「騙り」にならないよう、教師たちはいつもみずからを戒めなければならないのでしょう。

「人生も一つのストーリーだね」

ふくろうが、そうつぶやいています。はて、語りや本や読み書かせのことだけを考えてきましたが、ふくろうはどうも、わたしたちの人生も、一冊の本、一つの物語のようだと言おうとしているようです。

西ドイツ、カイザースヴェルトの母の家の図書室で、ふと見つけた詩のことが忘れられません。あなたがたは、平和を告げる鳩。絶望と悲惨のあるところにはどこへでも飛んでゆき、人々に救いをもたらし、希望を告げよ。こうして教育や看護の技能を身につけたディアコニッセ（プロテスタントの奉仕女）たちが、ここから世界中に送り出されて行きました。（その数名が日本にも来て、日本で最初の特別養護老人ホームをつくり、老人福祉法制定のきっかけとなってくれました。これを知っている人がどれほどいるでしょうか！）

このディアコニッセたちの働きが、その図書室には膨大な記録となって残っています。そのいくつかを手にして見ているうち、こんな詩を見つけました。

書いているのは、もう一〇〇年以上も昔の人、アグネス・カール。彼女は、ドイツのナイチンゲールと呼ばれたほどの人で、国際看護婦協会の設立期に、世界の看護婦たちのリーダーとなって働きました。その彼女の詩、

娘のころのある日　わたしは
ふるさとの草原の　川のほとりに座した
時がはてしなく　目のまえに広がってみえた
あこがれのかずかずを　思いうかべても
真にその時の広がりを　満たすものはなかった

そのとき　こころの奥底に　一つの予感が目覚めた
やがて　わたしの人生を形づくるものはなにか
まだとらえがたい　おぼろな構図ではあった

しかし　わたしは　今の今まで
　そのことを忘れたことがない

なにをして、どう生きようかと、彼女は考え、また迷ったことでしょう。そして、ふと与えられた予感に耳を傾け、彼女はやがて教師となり、さらに看護婦となって働くことになります。

そして、彼女の晩年の詩、

神はわたしを　はたのまえに置かれた
さかんに働き　わたしはすでにこの齢に達した
わたしは今　あの青春の長い日々のことを
思い起こそうとしている
短くなってきた　この一日一日と　そして　夜が
今までの働きを　寸断してしまわないように

かつて若い日に思い描いた構図が、織る布の表に現れているだろうか。わたしたち一人一人もみな、はたのまえに置かれています。そして、自分の人生のはたを織りつづけている。さて、どんな模様がそこに織りなされていっているのでしょうか。やがて、わたしたちのこの働きも手も止まろうという時に。

子どもたちは、ある年頃になると、しきりにいろいろな人の伝記を読みたがるようになります。自分の人生のストーリーを思い描いてみたいのです。彼のストーリー（his story = history）を知って、自分のストーリー（my story）を作ろうとします。もちろん、彼のものがそのまま、自分のものとはなりません。ストーリーを考えながら、自分はどう生きようかと考えます。

わたしの家には、何種類かの読書会がもたれています。その一つに、文庫に子どもをよこしておられるお母さんや、かつて文庫に来ていた子どもも参加できる集まりがあります。いつかそこで、いくらか古典的かなと思いながら、吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』をテキストに取りあげました。その時は、大人たちにまじっ

て、高校生たちが何人か出席していました。

彼らのその本を読んでの感想はこうでした。

「題名だけ聞くと、なんとなく面倒な本だと思ったけど、読んだらとても面白かった」

どの高校生も、口をそろえて「よかった」の連発。いつもは、むずかしそうな議論をしたがる、わたしたち大人も、この日だけは、もっぱらその高校生たちの読後感に教えられていました。

ちょうどこの年頃の子どもたちの心にぴったりの社会や人間の問題と、そこでの生き方が、ごまかしなく述べられているというのでした。

十五歳のコペル君、彼の心をそのまま叔父さんは受け入れ、その目の高さで社会や人間のあり方を一緒になって考えてくれている。それがとても嬉しいようです。哲学とやらをかみ砕いて教えてやろうという、学校の倫社の先生とは、ぜんぜん違うのだそうです。

「こんな先生や、大人がいてくれたらねぇ」

高校生たちは、ためいきをついていました。

シャルロッテ・ビューラーという心理学者が、子どもの心の発達段階は、子どもたちが好んで読む本にそれがあらわれているといったのは、もうずいぶん昔のことです。彼女のその研究に対しては、その後さまざまな意見があったようですが、子どもたちを見ていると、大筋ではそのとおりではないかと思います。

四歳くらいまでは、「もじゃもじゃペーターの時代」。子どもの心は身近な現実に向いている。そのあと八歳くらいまでは、「昔話の時代」。十三歳くらいまでは、「ロビンソン（クルーソー）の時代」。さらにその後、十四、五歳までは、「英雄の時代」だといいます。子どもたちの興味と関心は、ほぼその本またはジャンルで示された世界に向いている。

子どもたちはいろいろなお話を楽しみながら、実は自分を主人公にした物語を思い描き、作り出そうとしています。現在の自分たちを未来に投げかけ、自分のドラマを夢見ている。

わたしたちはよく、筋書きのない人生を送っているといいます。しかし、実際はそうではなく、かつて思い描いた筋書きが、そのとおりになっていないことで悩み、筋書きがないといっているだけのこと。いつでも筋書きを見つけようと努力しているし、また、そのために悩んでもいる。

ドイツのある心理治療家がこんなことをいっています。悩みは、三つのことで生じる。一つは、群のなかにいて、あまりにも人の強い影響下に置かれ、自分を生きていないとき。一つは、反対に、群から離れすぎ、ひとり立たされたとき。もう一つは、人生の一局面しか見えず、その先が見えないとき。

面白いと思います。人との関係だけでなく、わたしたちは自分のいのちが、どこへ、どう行こうとしているのかが分からなくとも、不安を感じて悩むのです。川の流れにたとえれば、目のまえの激流に、すっかりおじけづいてしまい、その先に広やかな流れがあることなど思いうかべようともしません。

それだからなのでしょう。子どもたちに語られてきた昔話は、そのほとんどが、幸せな結末で終るようになっています。困難があっても、かならずその先は明るいと物語ります。その意味で、昔話は楽天的ともいえます。でもこれが、昔話を語り伝えた人々の現実を生きての実感であり、子どもたちに伝えたい思いでもあったのです。

物語は、生きるためだけではありません、死ぬためにもわたしたちは、物語を必要としています。そのストーリーがあるからこそ、わたしたちは安じて死んで行けるのだともいえます。あらゆる宗教が、そして哲学が、なぜ確かめることもできないような死後の世界のことを、あれほど熱心に語り、説明しようとしているのか。

物語は、そしてそのストーリーは、わたし一人の生命を越えた広がりと奥行をもったとき、それこそわたしたちが心から安んじて、身を任せられる筋書きとなるようです。

テレビのドキュメント番組、「一日一生」―九十五歳の人間教育―で紹介された、現役の高校教師、桝本楳子（うめこ）さんという方がおられます。山形県の山奥の学校、キリスト教独立学園というおそらく日本一小さい高等学校で、書道を教えておられる方です。五年前、たまたまクリスマスの翌日に訪ねたわたしに、一枚の書を見せてくださいました。

「九十のクリスマスを迎えて、クリスマスの晩、ひとりこんなのを書いてみました。わたしの所感です」

そこには、しっかりと、しかも流れるような筆でこうしたためられていました。

わが心は主をあがめ
わが霊は救主なる神を
よろこびまつる
その婢女のいやしきをも
顧み給えばなり

そして、その色紙の裏には

千九百八十二年　クリスマスの晩
九十　ばば書く

雪の降り積もる山のなか、静かにご自分の一生を思い返されたことでしょう。そしてそこでの思いは、自分のような者をも顧み、用いてくださったという、あのマリヤの讃歌そのものでした。二千年前の一女性のドラマが、今、ここで、それがそのまま現実となっている。

九十五歳になった楳子先生はよくこんな話をなさいます。

「わたしたちは、みんなでお芝居をしているのです。どの人にもそれぞれふさわしい役が与えられて。楽しいですね。わたしはこれをなんって呼ぼうかしらと考えたけど、やっぱり、天国座と呼ぶのが一番いい」

子どもの頃、よく歌舞伎座にお芝居を見に連れていってもらったそうです。演じる人と見る人。そして、その

両方が一つの劇場のなかに納まっている。それが今しきりに思い出されるのだそうです。

「わたしも最後までちゃんと自分の役を演じなければいけません。年だからって甘えているわけにはいきません」

「九十五にもなると怠け心がでてくるんです。いつもは六時前に起きるのが、六時をすぎても起きようとしなかったり、今日は寒いから掃除はちょっとにしておこうとか、洗濯は休もうとか、年に甘えたり、寒さに甘えたり、だめですね」

しかし駄目な自分を決していじめているわけではない。暖かく突き放して、ユーモアをもって受け止めておられる。

「客席にいるわたしが、舞台にあがっている桝本楳子をみて、それがどんなお芝居をするかみているんです。楽しいですよ。みなさんもみんな、そのお芝居にでている」

舞台のうえで行き詰まることがあっても、天国座の総監督がちゃんと見ておられる。そして、必要な助けはちゃんと与えてくださる。楳子先生の人生舞台論、いや世界舞台論は、果てしなく大きい。

苦労の多い人生だったと聞きます。きっと行き詰まるたびに、帰り着くところに帰って、再出発されたのでしょう。

人生もまた、一つのストーリー。問題は、その筋道が見えなくなったとき、わたしたちは、どこに、どう帰ればよいのか。

もみの木の匂い
ローソクのほのめき
クリスマスのうた
美しく包まれた　プレゼント

ああ　わたしは
どこか外へ　出て行かなければ
冷たい夜のなかへ

氷が　かたくきしむ
待降節　そして　クリスマス
わたしは　それにあたいするのか

わたしのうちに
子どもが泣く
戸を叩いている
光へと　出たがっているのだ

きたりたまえ　主よ
みちびきたまえ　光へと

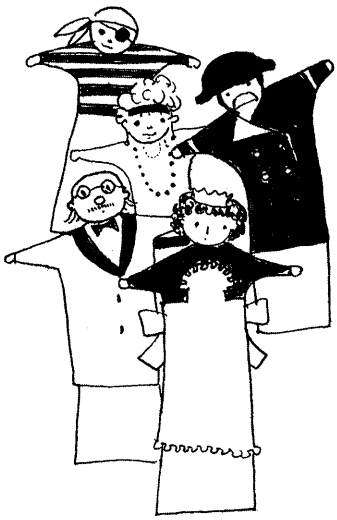
スイスのケティ・ホール夫人の詩です。

偽り、見せかけ、そのすべてが問われ、剝ぎ取られるとき、わたしたちはただ、光を求めて泣き叫ぶ内なる子どもに帰ります。でも、それこそが、新しい出発の地点、古い物語が新しくよみがえって、わたしたちに生きるストーリーを思い起こさせてくれる時です。

「いいかね、君のストーリーがなにかを、ときには思い起こし、考えなさい。子どもたちが、君に問う一番のものは、それなのだから」

ふくろうは、とどめをさすように、わたしにはっきりそう語りかけました。

（新潟大学医療短期大学部）



クリスマスと子ども

関　史子

(一)

メリー・クリスマス――この言葉を耳にした瞬間、皆さんは先ず何を思い浮かべるでしょうか？　この日がイエス・キリストの誕生をお祝いする日であること位は、キリスト教の信者でなくともよく知っている筈です。しかし、日本で行なわれている「クリスマス」の行事を静かに考えてみると、クリスマスツリーを飾ったり、プレゼントをお互いに交換したり、みんなで集まってケーキを食べたり、サンタクロースからプレゼントをもらう等。純粋な宗教的行事の印象よりも、むしろ宗教を離れ、私達の生活に密着した楽しい年中行事のひとつというイメージが極めて強いのではないでしょうか。このように本来の意味からいえば、形だけをとり入れたこの日本の「クリスマス」は本当の意味のクリスマスとは呼べないものかもしれません。更に又、十二月に入るとデパート等ではクリスマスソングが流れ、プレゼントや飾り

つけの品が所狭しと並べられます。この傾向は年々エスカレートして、私たちは商業ベースに乗った「クリスマス」という名のお祭り騒ぎに巻き込まれているような錯覚に陥る事さえあります。その他、数多くの幼稚園では「クリスマス」を園児募集に結び付け、参加した父母にプレゼントをしたり、子どもたちに派手な衣裳をまとわせて、いわゆる「クリスマス・ショウ」を展開している幼稚園の光景をみる時、教育に携る者としては、それは、少からずひんしゅくを買うような世相と云わざるを得ません。

それでは一体、子どもたちにとって「クリスマス」とは何なのでしょうか。端的にいえば、それは子どもの生活そのものに欠くことのできない楽しみなものと断言できます。

「デパートでファミコンを買ってもらう」「ケーキやご馳走をみんなで食べる」と云った現実的なものから、「クリスマスツリーを飾りながら、その美しさと神秘さに胸をはずませる」「サンタクロースからのプレゼントを楽しみに待つ」と云った夢のあるものまで、楽しみ方はさまざまですが、その日が「いつもとは全く違う特別な日」であることは、どの子にとっても同じです。また子どもにとって「夢を育てるための要素が沢山含まれている日」でもあると考えられるのではないでしょうか。

(二)

ここで、日本だけでなく、他の国では「クリスマス」をどのように祝うのか、その特徴を簡単にご紹介いたしましょう。『メリー・クリスマス』(R・B・ウイルソン・文、市川里美・画)という絵本の中に、いろいろな国のクリスマスの過ごし方が書かれているのを見つけました。まず「イギリスとアメリカ」はどうでしょうか。クリスマスツリーに豆電球やキラキラ光る飾りを木の枝にとりつける。家族や親せき、友達が集まってご馳走を食べる。だんろの上かベッドの足もとに、靴下をぶらさげる。そしてその靴下の中にサンタクロースから、自分の願いをこめたプレゼントの入ることを夢みながら、イヴ

の夜はふけてゆくのです。これは、日本の祝い方とよく似ていて、日本のクリスマスがどこの国から入ってきたかがよくわかります。

「ドイツ」では十二月に入るとすぐに待降節（クリスマス前の十二月一日から二十四日までイエスさまの誕生を待ち望む期間）のカレンダー（二十四の小さな窓を毎日一つずつ開けていくもので、それぞれに絵が描いてある）を使い始め、クリスマスの来るのを今か今かと楽しみに待ちうけるのです。またお母さん自ら飾りつけたクリスマスツリーを、子どもたちはイヴの夜に初めて目にするのです。これは子どもたちにとって胸おどる一瞬といえましょう。更に又、プレゼントをおねだりする手紙を、おさな子のイエスさまに宛てて書く習慣があります。イエスさまが目をとめてくださるように子どもたちは一生懸命に工夫をこらすのです。このようにドイツの場合は、子どもの夢を育てるような演出が沢山もりこまれているクリスマスだと思いました。

「ポーランド」のクリスマスは、イヴに一番星が出始めると、ご馳走を食べ始め、まずうす焼きパン（マリヤ・ヨゼフ・赤ちゃんのイエスさまの絵が押してある）をめいめいに少しずつちぎり、隣りの人に渡します。また床やテーブルクロスの下には、ほし草（イエスさまが馬やでお生まれになったことにちなむ）が敷かれ、テーブルにはマリアとイエスさま用に空いた席が二つ設けられ、マリヤがイエスさまを連れてお客にいらっしても、いいように用意をしておくという習慣もあり、クリスマスの物語にちなんだ形での過ごし方を、しみじみと知ることができるのです。

「オーストラリア」では、真夏の暑い盛りにクリスマスがやって来るので、海や田舎にピクニックに出かけ、ご馳走を食べます。「インド」では、バナナ・マンゴーの木に飾りつけをするなど、その国その国の独得のクリスマスの過ごし方があることがわかりました。

(三)

次に保育者である私にとって、当然見逃がすことので

きない保育の中での「クリスマス」について考察してみる必要があると思います。幼稚園には四月からの一年間に様々な行事があることは、ご承知の通りです。私ども横浜学園付属元町幼稚園でも遠足、バザー、運動会、生活展、クリスマス、おもちつき、お誕生会等々があります。それぞれが、子どもたちにとって楽しく、また生活の節目になっていることは申す迄もありません、その中でもクリスマスは特に、他の行事と比較して、子どもに夢の世界に目をむけさせる場面が非常に多いことを感じておりました。サンタクロースの「赤い服」「白いひげ」「大きな袋」「トナカイ・ソリ」等。だれ一人として知らない人はいない位に有名ですが、今日までだれ一人として本物のサンタクロースに出合った人はありません。目には見えないその人の存在を信じ、その人からのプレゼントを待つ。又、クリスマスツリーの美しさに心を躍らせたり、キャンドルの光を見つめて神秘的な別世界へひき込まれるような気持になる。いずれも現実的な日常生活とはかけ離れた、「夢の世界（想像）」を信じ、その中で心を遊ばせる体験のできる大切な機会でしょう。

このように子どもに夢を与え、育ててくれるクリスマス、それは、キリスト教とは全然かかわりのない私の幼稚園でも欠かすことの出来ない大切な行事になってしまっています。私の園でのクリスマスの過ごし方を具体的にご紹介いたしましょう。

毎年十二月二十五日近くに「クリスマス会」が行なわれます。各クラスの保育室は思い思いの製作物で飾られ、園児はその日の来るのを楽しみに待っています。そして当日、クリスマスツリーの飾られたホールに全園児が集まり、クリスマスにゆかりのある歌を歌ったり、キャンドルの光の中でお話を聞いたりします。また、その年によって、サンタクロースが登場したり、その人の声が流れたりするなど、楽しくて而も不思議なことがいっぱいのクリスマス会が催されるのです。またサンタクロースからは、幼稚園生活が尚一層楽しくなるために、皆んなで使用するもの（例えばコルク積木、上等なママゴ

トセットなど）がプレゼントされます。その他に、子どもの事を世界中のだれよりも大切に思っていてくれるお母さんサンタクロースによるクリスマスにちなんだ人形劇を見たり、お母さんが心をこめて作ってくれたケーキをみんなで少しずつ分け合って食べたりします。

このように私の幼稚園ではクリスマス会が子どもにとっては「楽しいもの」であり、「不思議だな」「きれいだな」「うれしいな」「ワクワクするなあ」といった気持が味わえるものであってほしいと願っています。また「みんなで楽しむ」「みんなで分ける」「いっしょに使う」といったことを体験出来るような配慮をしています。こう考えていきますと、クリスマスは保育の現場にとっても、欠かす事の出来ないものであり、ぜひ積極的にとり入れたいものといいたいのです。

(四)

然らばその行事を通して、私たちは子どもに何を育てていけばよいのでしょうか？

まず第一に考えられるのは、「夢を信じる心」だと思います。「サンタクロースはどこに住んでいるのだろう？」「本当にいるのか？」「どこから家の中へ入って来るのだろう？」このように想像力をフルに働かせて、サンタクロースのことを考える時、子どもの心は不思議な気持でいっぱいになります。そしてその時、子どもの中に「目に見えないものを信じる心」が育っていきます。人はいつも夢みて生きています。昔の人は「鳥のように空を飛んでみたい」という夢を信じて、その実現のために努力し「飛行機」という素晴らしいものを発明してしまいました。「そんな事、無理に決っている！」と事前に結論づけられたら、そこからは新しいものは何も生まれてこなかったことでしょう。

また先日、ガンと闘う人たちが欧州アルプスの最高峰モンブランへの登頂に成功したというニュースを耳にした時、その人たちの心には単にそれが「生きがい療法」にとどまらず、それを乗り越えて「あの山へ是非登りたい」という夢があったればこそ、素晴らしい成功につな

がったのではないでしょうか。

人間が生きていく上で「夢」を持つことは絶対必要なことだと信じています。それによって科学が発達したり、意欲的な生き方をすることが出来るなど、「夢」はそれを実現しようとする時、驚く程すばらしい底力を人間に与えてくれるような気がいたします。そしてこの事は勿論、子どもたちにもあてはまります。

即ち、子どもの生活を考えた時、それは「夢」にあふれています。例えば「大きくなったら、お医者さんになりたい」というような大きな夢から、「早く自転車に乗れるようになりたい」といった身近な夢に至るまでそれを実現するために懸命に努力をする。その努力の繰り返しが子どもにとって「生きる」ということであり、成長へとつながる大切なものだと思います。

更にもう一つ、クリスマスがプレゼントを「受ける喜び」から「与える喜び」を持つためのきっかけになってくれたら……と願っています。

子どもたちは、お誕生日になると、身近で親しい人からよくプレゼントを頂きます。

この場合のプレゼントは、本人が今、どんな物を欲しがっているかを、事前に探知していて、或いは一緒にデパート等に出向いて行き、その場で買い求めるというような例が多いように見うけられます。

ところが、サンタクロースから頂くプレゼントは、子どもたちが手にするまでは皆目見当がつきません。「一体何がプレゼントされるのだろうか？」と子ども心にも、その期待の大きさと、片や不安の気持が入り乱れ、あれやこれやと考えながらますます胸をふくらませ、心はときめきます。そして実際、自分の欲しかったものとピッタリ、プレゼントが合致した時の喜びはひとしおです。

「サンタさんは、こんなものが私にピッタリだと考えてくれたのだなあ!!」「サンタさんは私の欲しいものをちゃんと知っていてくれたんだなあ!!」その喜びの心が「それではお母さんにも何かあげよう!!」と先ず身近かな家族の人に向けられ、更に「お友達にもプレゼントし

たい」という様に周囲の人々へと、輪が拡がってゆくことになります。更に、この考えは即物的なものから、目に見えない心の問題へと展開し、「人の喜ぶことをしてあげる」とか「みんなの役に立つことをしてみたい」というふうに変って来ることができれば、素晴しい事だと思います。

あたかも花は美しさを惜しまず、だれにでもその美しさを与えているように。

小鳥は楽しい歌を惜しまず、だれにでもその楽しい歌を与えているように。

人は何かを与える時、その心は豊かになるのです。

「受ける喜び」から物であれ、心であれ、「与える喜び」への転化は、人間にとって最も大切な事ではないでしょうか。ささやかな「クリスマス」の行事を通して、このようなことが子どもに育てられたら……と私は祈っています。

(五)

今回「クリスマス」というテーマを与えられ、保育とのかかわりについて考察してみると、今まで「夢は大切なもの」と何気なく結論づけていたことが、何故大切なのか、そこに深い意味があるのを私なりに整理することができました。即ち夢は、人間に生きる意欲を与えますし、また如何にしたら、それが実現出来るか、いろいろと工夫をこらす時に、創造力が刺激され、そして、失敗しても挫折することなく夢を持ち続けるには、忍耐力も必要となります。

又夢を思い描く時、人は心豊かな気持にかられます。そしてこれ等は、人間が豊かな人生を送る為に欠かすことの出来ない「基本的な能力」ばかりです。子どもは思いやりがあって、しかも心豊かな人間に育てることを保育の目標に掲げている私にとって、「クリスマス」とは、夢の大切さを気づかせてくれる、人間の生活にとって、かけがえのない行事であることを強調したいと思います。

(横浜学園付属元町幼稚園)

中国のむかし話

「王子アーツゥと青稞（チンカア）のたね」

近藤伊津子・編

むかしむかし、チベットに布拉（ブーラ）国があったころのはなし。

このプーラ国はどこまでも広い国でした。けれどもあるのは牛と羊だけで、この国の人々は、その肉を食べ、その乳を飲むだけであとにはなんにもたべものがありませんでした。

プーラ国の王子アーツゥは、

勇敢で知恵のある若者でした。王子アーツゥは、遠くのどこかの国には、牛や羊だけでなく、もっといろいろの食べものがあることを聞いて知っていました。そして、そういう食物をプーラ国にも欲しいものだと思っていました。

ある日のこと王子アーツゥは馬を走らせ狩りに出かけ、国の果ての大きな滝のところにきていました。

流れ落ちる滝を見ていると、とつぜん滝の中から山のように背の高い老人がでてきました。白いひげは、山の頂から川下まであり、まるで滝のようでした。

王子アーツゥは、われを忘れて見ていると、

「プーラ国の王子アーツゥよ」と老人から呼びかけられました。

その老人は、滝のようなひげをひねりながら、大きな手をさし出し、「王子よ、このプーラ国から、九十九の山を越えた百番目の山に行くがよい。百番目の山に大きなほらあながあり、それが蛇の王の住居であるのじゃ。蛇の王の玉座の下に、青稞(チンカフ)の、種子がかくされておる。

蛇の王は、この種子を決して人間に渡そうとしないのじゃ。いままで幾たりの人間がこの種子を求めて、そこにやって来たことか。そして、蛇の王につかまえられ、犬にさせられてしまったことか」

じっと耳を傾けている王子アーツゥに、

「おそろしくなったのかな、王子アーツゥよ」と老人はいいました。

「いいえ、少しもおそれません。その青果(チンカア)の種子が手に入れば、このプーラ国は豊かになるのでしたら」王子アーッゥは言いました。

老人はそれをきくと愉快そうに大笑いしました。すると、山は腰をかがめ、滝は流れ落ちるのを忘れました。

「ようし、勇敢な王子アーッゥよ、行くがよい」老人は懐から一粒の黄色の豆粒をとり出し、

「王子アーッゥよ、この風珠(かぜのたま)がお前を万一の時は助けてくれるだろうよ。身に危険が迫った時は、この風珠(かぜのたま)を口にふくむがよい。すると、風のように走ることができる。

又、もし、蛇の王に犬にさせられてしまったら、東の方向に、ともかく走るのだ。王子アーッゥよ、そうすると、一人の娘に出逢うだろう。その娘が、一緒にプーラ国にもどってくれたなら、犬から人間にもどることができるだろう。

さあ、勇敢な王子アーッゥよ、行くがよい」そう言いおえると老人は、長いひげのまま滝のうしろに姿を消してしまいました。

王子アーッゥは蛇の王のすむ山へ向って、旅立ちました。

馬に鞭あて、走りに走りました。いつしか緑の山々の色が変わり、木々の葉も落ち、こがらしの吹く頃になって、百番目の山、蛇の王のすむ山にたどりつきました。

山には、大きなほら穴があり、そのまわりには蛇がとぐろをまいていました。

王子アーツゥはうまくほらあなにもぐりこみました。あなの奥には蛇の王が、王座でいねむりをしているところでした。王子アーツゥは勇気をふるい起して、蛇の王のねむっている玉座の下に手をのばしました。そこには、あの老人の教えてくれた青稞（チンカァ）の種子がありました。

王子アーツゥは一つかみ、二つかみ……そしてもう一回、と手を伸ばした時、うかつにも蛇の王の尾をふんでしまいました。たちまち「りんりん、ろんろん」と蛇の王の尾につけている鈴がなり、蛇の王は目を覚まし、

「大胆不敵なヤツ、オレの青稞（チンカァ）の種子を盗むとは！」と怒鳴りました。蛇の王の家来の蛇が、逃げる王子アーツゥを、どっと追ってきました。

蛇の王が首をもたげて、王子アーツゥをにらみつけると、にわかに、空はかきけむり稲妻が光り、雷鳴がとどろきました。一瞬、王子アーツゥは気を失ってしまい、そして、目が覚めると自分が犬になっているのに気付きました。

王子アーツゥは老人からもらった風珠を思い出し、口に含むと、たちまち翼が生え、天高くとび上がり、羽ばたくたびに山を越えました。王子アーツゥは首に青稞の種子の袋をさげて、東の方へ東の方へと、山をいくつも越えました。

こうして、いつのまにか二度目の夏がすぎていきました。

王子アーツゥが草原の婁若（ロールオ）という村にたどりついたのは、夏の終りの満月の夜でした。

丁度、この夜、村の草原では、この年の豊作を祝う宴会「鍋荘（ゴーツァン）」がくりひろげられて

いました。

今年の「ゴーツァン」は村の長（おさ）の三人の娘の婿選びもあるということで大そう賑わっていました。

ことに、気立もよく器量もよい末娘ウーマンの婿になりたいと、若者たちは、だれしも思いました。三人の娘は、お婿さんにあげるくだものを懐に入れ、「ゴーツァン」の踊りを舞うのです。

若者たちは三人の娘を囲みました。村人たちは草原に腰をおろし、奶茶（ナイツァー）を飲みました。

いよいよ、三人の娘は、村人たちのうたう山の歌にあわせて、軽ろやかに跳び舞う「ゴーツァン」を踊りはじめました。

一回目の踊りのあと、上の娘は、ひとりの若者に果実をあげ、お婿さんが決まりました。又、三人の娘は舞い、村人たちは歌いました。そして、中の娘も、お婿さんを決めました。

三人の娘は、三回目のゴーツァンを舞い、村人たちは三回目の山の歌をうたいました。

若者たちは、かたずをのみ、待ちました。けれども、末の娘は、だれにも果実を渡しません。

末の娘ウーマンは、若者たちの人垣を分けて、入って来た犬にかけより、そっとなで、だきよせていました。いつのまにか犬の上に果物がのせられていました。

若者たちは、あっけにとられ、村人たちは口々にはやしたてました。末の娘ウーマンは

犬をお婿さんに選んだのです。

村の長は「よくも親にはずかしい思いをさせたものだ。犬と一緒に出ていくがよい。二度と村にもどるな」と怒鳴り、とうとう、末の娘のウーマンは、犬ともども追い出されてしまいました。

末娘ウーマンは、犬をつれて草原にさまよいました。末娘ウーマンの流す涙を見て、犬は「心やさしく、美しいウーマン、泣かないで下さい」と話しかけました。そして、自分は王子アーツゥであること、青稞の種子を探しに行って犬の姿にさせられたことをはなしました。それを聞いた末娘ウーマンは、王子アーツゥのプーラ国に一緒に行くことをよろこんで承知しました。

王子アーツゥは、青稞の種子を道に播きながらプーラ国をめざして走り続けました。だんだん後の方になってしまったウーマンは、種子に沿って辛ぼうづよく歩き続けました。

どれだけ時がたったでしょう。ウーマンは、どれほどの道のりを歩いたかわかりませんでしたが、王子アーツゥの播いた青稞の種子が青い芽を出したところを通りました。やがて、立派な苗になっているところを、…そして、いつのまにか青稞の穂が黄金色に実っているところを通りすぎました。その次には、又、新しい芽が出ているところを歩きました。

こうして、どれだけ歩いたのかわからないほど歩き続けました。

もうこれ以上、歩けないと思った時、プーラ国にたどりつきました。ウーマンの目の前に犬がかけよりましたので、手をさしのべました。

とつぜん「ホーン」と一陣の煙がまい上がり、王子アーツゥが、立派な若者となって現われました。

それから、ロールオの末娘ウーマンと、プーラ国の王子アーツゥは、結婚しました。

こうして、プーラ国には、はてしなく広がる草原のむこうのロールオの村まで、青稞の穂が実りました。

こういうわけで、今でもチベットでは青稞からとれる粉を練って「糌粑（ザンバ）」を作り、まっさきに犬にお供えします。

奶茶＝牛乳と茶をまぜた飲物

（かっこう文庫主宰）

子どもの会話（その四）

無藤　隆

幼児が幼稚園で友達同士遊びを形成し、展開する時、そこには、様々なやり取りが成り立つ。互いに妥協しながら、と言って、むやみに譲ってばかりいたら、遊びにならない。遊びが進まず、熱中できないし、そして何より、一つのテーマが成り立たなくなる。そこで、主張や防衛も必要となる。ここでは、その様子を眺めてみよう。

以下に示す例は、ある幼稚園での砂場での遊びを記録したものである。子どもは、4・5歳児である。

1. テーマの設定

砂場で、子ども達は、普通、砂を掘って、ダムを作ったりする。何を作るのかがまず問題となる。それは、通常、誰かが提案をすることで始まる。その場合、一人の意見で決まることも、話し合われることもある。次の例では、互いに考えを出し合って、テーマが発展していっている。

例1

A　おだんご作ろうよ。

B　え？

A　でさ、これが包紙。

B　こんなに汚くなっちゃったよ。

A　だから、新しいの。

B　だめだよー。

ここ水があるから取って。私が上からかける。

この会話の前で、A、B、Cの三人が水たまりに紙を浸したり、その上に砂をかけたりして遊んでいた。Aは、初め、水たまりを「ダム」と呼んでいるが、紙の上にドロドロの砂をかけている内に、泥んこでのお団子作りを思い付く。そして、紙を包紙に利用することにする。相手の子どもは、新しい紙を使うことには反対するが、団子作りには賛成で、作った団子の上に水をかける遊びをさらに提案する。この提案は、全く新しいものというよりも、その前にしていた紙を水に浸したり、砂をかけたりの続きでもあるだろう。続いて、

例1（続き）

A　あー。

B　どんどん、どんどん、どんどん水入れてって。

A　（水を汲みに行く。）

B　どんどん水入れてって。おだんごの水。

A　ダム作って、ダム。ダム、ダム、こういうダム。もっとどろどろに。おだんごやさんのだけどさ。

ここ工場ね。おだんごやさんの工場。

C　いいよ。

A　工場。

B　あ、向こうに流れていっちゃうよー。

A　ここ近道。ここが工場だからいいの。

紙に包んだお団子を水に浸して、紙を広げると、お団子が溶けてなくなるのをおもしろがったり、さらに水を入れたりしている内に、水たまりをAは再び「ダム」と呼

ぶ。前の言い方が記憶に残っていたのかも知れないし、あるいは、子ども達はよく砂場の水たまりを「ダム」と呼ぶことが多いので、そう呼んだのかも知れない。いずれにせよ、お団子作りのテーマとつながらない。そこで、Aは水たまりを「おだんごやさんの工場」と見立てて、テーマにふさわしいものに変えている。水たまりは、泥が貯められるところであり、その泥から団子が作られるのだから、実質を伴った見立てである。

さて、この遊びでのテーマの展開を見てみると、行為の水準の断片的遊びと見立て・ごっこの水準の遊びとの違いが感じられる。前者は、物とその物への働きかけの面白さを追求しており、その限りで互いの了解は得易い。していることの意味が見え易いし、模倣し易い。しかし、あるものを作ったり、ごっこをしたりするためには、枠組みなり目標なりが必ずしも行動だけでは分からず、言葉での了解がいる。〝テーマ〟とここで呼んでいるのは、そのような行動の水準を越える遊びの要素のことである。例で分かるように、このテーマは、遊びの中で一貫したものとして、遊びの流れを規定する。とりわけ、見立ての水準においてそうだ。

ここでは、主に一人の子どもの提案でテーマが決められているようだが、決して、一方的に決めているのではない。必ず相手は了解するか（返事をするかも知れないし、すぐに了解に基づいて遊びを開始するかもしれない）、異議を唱えるかする。先の例では、団子には賛成するが、部分的に修正している。また、「工場」の所では、相手の暗黙の疑問を受けて、自ら修正している。そして、次に相手が「いいよ」と言葉で受け入れている。交渉の結果として、テーマが構成されているのである。

テーマが定められたならば、その元で遊びが展開される。そこでは、展開の仕方について交渉されると共に、遊び集団を自立したものとして維持していく必要がある。その点で興味深いのは、一つは、集団の維持の裏返しとして、新しい参加希望者にどう対処するかである。この「仲間入り」の問題は、いざこざの所（前回）でも触れた興味深いものである。この分析については、紙幅

の関係で、別の論文に譲る。（「幼児のコミュニケーション」、現代幼児教育、1983、14-2、11-15。）その要点は、遊びの仲間にはいることは、単に一緒に遊ぶというだけでなく、遊びのテーマを知り、あるいはそのテーマにふさわしい行動をすることなのであるということである。

遊びの展開に関しては、一つ注目出来る点がある。それは、遊びの中の役割の分担である。次に例を挙げて考えてみよう。

2. 役割分担

砂場遊びで水を使うと、砂を掘るのと水を汲んでくるのと二つの作業がどうしても必要になる。しかも、水を汲んでくるのは、砂場遊びそのものと直接関係がないので、つまらなく、皆あまりやりたがらなかったりするし、また砂遊びそのものの中でも、いろいろな分担が必要になったりする。そこで、分担の工夫が必要となる。

例2

B　私、汲んでくるわ。

C　ちょっとじゅん君（A）も掘ってよ。

D　こうゆう風に掘るんだよ。貸してごらん。

C　じゃ、はじめ君（D）掘ってくれる？（D掘る。）

B　（水を汲んでくる。）はい。

C　じゃ、ゆき、水流す。

B　じゃ、ゆきちゃん、水流す係ね。

C　うん。

B　もっと使って下さいな。

　私の方が忙しいんだからね。

D　工事係。

C　水入れる係。

D　ぼく、工事。何か仕事はありませんか？

C　今ありませんよ。

D　ここはありませんか？

C　でも、掘って下さい。

ダムを掘って、水を流して遊んでいるところで、Bは水くみをする。Cはシャベルで掘り始め、Aに協力を求める。Dもシャベルで上手に掘ってみせる。すると、Cは掘るのをDに任せて、自分は水を流すことにする。水を汲んできたBは、それを聞いて、係という言葉を使って、Cの役をはっきりさせる。続いて、Dが自分のことを「工事係」、Cも改めて「水入れる係」と宣言する。ここで、B、C、Dはそれぞれ分担が明示化される。Aは言葉で宣言はしないものの、掘る側に回っている。ダム作りの作業が明確に進められることになる。そして、具体的に作業を開始することになる。

　このように、遊びの中では、全員が何らかの作業をする。そうでない子どもは遊びの中にいられない。遊びの仲間なのにぼんやり見ていると、先の例での「じゅん君」のように、「掘ってよ」と要求されることになる。また、行動の上で分担するだけでなく、言葉に出して自分の役割を明確化する。それは、水くみの場合、砂場を離れても、遊びの中の作業を実行しているのだと相互に

確認するという働きがあるだろう。他の作業でも、同種のことはある。「係」を引き受けていれば、見ているのも、ぼんやりしているわけではなく、監督していたり、「工事」の場所を捜していたりすることにしやすいし、そのような了解を得易い。

言葉に出すことでまた、何をしようとしているかの計画をみんなの了解の元に置くことができる。「水を汲む」、「水を流す」、「工事」すべてこれからすることを示している。

ここで、「係」という言葉を使っていることが興味深い。この言葉はおそらく、幼稚園の先生が子どもにやらせる「係」から来たのだろうが、子どもが一度きりの行動をするのでなく、安定した分業をしているのだという感じを強めている。そしてまた、ダム工事という大人の世界に通ずるごっこの想像を支えてもいるだろう。

この分担はもちろん固定されたまま進行することは少ない。むしろ、遊びの展開に伴って変化していく。その変化はまた、子どもの交渉の問題であり、遊びの面白さを構成するものでもある。

作業を分担することは、ある物を集団で作るのに必要なことである。そのための交渉は幼児にとって決して容易なことではない。その際、作業の分担が例えば、「ダム作り」という子どもにとって明確なテーマと目標の元でなされていることが交渉を容易にしている。と同時に、しばしば、分担そのものが、単なる作業ではなく、ごっこの想像された世界の一部をなす役割となっており、それは途中の作業を興味深いものにする。

砂場遊びは、砂や水という材料の手ごたえとそれらへの働きかけに対しごっこ的な想像が同様の比重で成り立っており、独自の遊びのあり方を作り出している。特に、集団で遊ぶ場合、出入りや分担が起こり易い点も面白い特徴である。

（お茶の水女子大学）

保育における受容の問題

山手　法子

子どもと共に過ごした一日の、印象や出来事を書き留めた記録を読み返す。すると、たとえば、目を見合わせて笑い合ったときの感じとか、手をつないで走ったときの感じとか、その時の日の照り具合、風の吹き方までが、まるでそこにいるかのようにふいに蘇える。同時に、私は、子どもと過ごしている自分の姿を、まるで別の人のことを見るように見ていることに気づく。

それは不思議に同時である。そこにいて、そのときの空気に浸っているような感じと、その自分を遠くから眺めているような感じが同時であるというのは、厳密な言い方ではないかもしれないが、保育の記録を読み返すときには、あるいは日記を読み返すときにも、

そんな感じがするものではないだろうか。自分の経験の記録を読み返すときの、それがひとつの特徴ではないかと思う。

個人の独自な経験を研究として他者に差し出す場合には、この感じを自覚的に区別して、交互に繰返すことが必要なのではないかと思う。つまり、経験のさ中における感情や雰囲気を呼び覚まし、そこに浸りながら、一方で、自己を対象化し解釈するという、相反する二つの過程がなくてはならない。そして、この二つの過程は、一方が行き過ぎないよう、互いにチェックし合う働きをもつ。そのときの経験からかけ離れた解釈が一人歩きしないよう、また、そのときの感情に流されて一方的な見方に陥らないよう、この二つの過程を行き来することで、経験のある側面についての解釈が、ひとつの可能性として生み出される。

記録を書くときにも、自覚するしないにかかわらず、私たちは、すでにこの二つの過程を行き来している。記録を読み返すときと、書いたとき、さらに実際に動いていたときの解釈（意味付与のし方）のズレが、保育者である私の変化を物語る。そのズレが生じる過程を丁寧にたどって省察してみると、それは私の経験の省察であるにもかかわらず、その時を共に生きた子どもの変化や、関係が動いていく様子が浮かび上がってくる。

保育者は、子どもの生育歴や家庭の事情等、他の情報から完全に自由になることはできないし、それを得ることに積極的な意味のある場合もあるが、なによりも、自らが子どもと生きたその経験こそが、保育者による保育研究の唯一の拠り所であることに変わりはな

い。実践研究のおもしろさは、その個人の経験の省察が、全く異った経験をしている他者にも共感をもって読まれ、次の実践を支える力となり得るところにあると思う。個人の経験を、実践者の共同の洞察へと高める努力が、次の実践をより豊かにしてくれる。実践と研究の不可分な所似であると思う。

以下に示すのは、養護学校に通う一人の女児Yとの関係における、私の経験の省察である。私は、大学3年の春から約四年間、愛育養護学校家庭指導グループで、実習生として保育に参加させて頂いたが、その内の二年半、週二回の保育時間のほとんどを、Yと共に過ごしてきた。ここでは、後半の約一年間の記録をもとに、保育における受容の問題について考えていきたい。

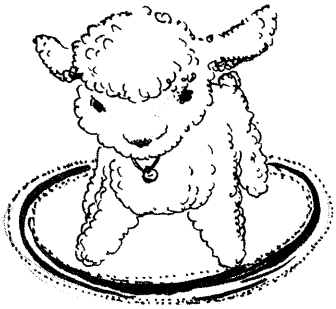
尚、ここに示すのは、一九八六年度提出の修士論文の一部であり、第四十回日本保育学会において発表したものであることをお断りしておく。

1. 自己批判としての問い

私にとって、自明な態度として語られ目指されてきた。しかし、Yが受け入れ難い行為を繰り返すようになったとき、その自明性は崩れ去り、私は、Yが受け入れ難い子どもを「受け入れる」ということは、保育者である

行為を繰り返すということ以上に、Yを受け入れられないでいる自分に気づいて愕然となった。子どもを「受け入れる」ということは、もはや私にとって自明なことではなくなったのである。

Yは、他の子どもから奪い取るようにして私の手を引き、私と過ごすことを望んだが、Yの要求は快く応じられるものばかりではなかった。Yの要求に応じきれず、楽しく過ごせない自分を感じるたびに「Yといるのは私でよいのだろうか」「他の人とならもっと楽しく過ごせるのではないか」という思いが頭をもたげてくるのだった。だが、そう思ってYから離れようとすること自体、私の手を引くYの要求から目をそむけること、Yを受け入れないことになるのではないか。だが、Yは、相変わらず、私の手を引き、無理な要求をし、怒り、泣き崩れ、かみつき……それは、果てしない堂々巡りのように思われた。



そんな時には、Yと楽しく過ごせたひとときを「こんなに楽しかった」と強調して記し、あるいはまた、「そんなに悲観することはない」と自分を励まし、それでも尚、「Yを受け入れていないではないか」という非難の声は、繰り返し私を襲ってくるのだった。しかも、それは、保育者としてあるべき姿ではないという価値判断を伴っていた。

こうして、私は、自己を批判することによって、保育者としての「危機」に直面することになった。自己批判を通して立ち現れた「危機」は、自己を問題にした他ならぬ「私」によって、いかに克服されていくのか。生きられた経験としての「危機」とその克服の過程を、以下に省察する。

2. 記述を拒む体験

Yは、私の肩や腕を「かむ」という、私にとって受け入れ難い行為を繰り返した。しかし、記録を読み返したとき、血が滲むほど何度もかまれた場面のひとつひとつについては、記録にはほとんど残っていないことに気づかされる。この記述されなかった体験の意味を、体験主体である私自身の立場から問うたとき、かまれるという体験が、まさに「記述を拒む体験」として生きられていたことに気づかされる。そして、日常の自明性が失われることによって生じる「危機」と「記述を拒む体験」との密接な関係が浮上してきた。

ここでの「かまれる」という体験を考えると、それはあまりに唐突で、身体的苦痛を伴う、非日常的な体験である。意味に満ちた相互主観的な世界は突如消え去り、ひとつの流れとして生きられていた体験は、そこで断ち切られる。「かまれる」ことが、それまでの時間的空間的文脈と無関係な程、それに伴うショックは大きい。

しかし、こうして不連続に生きられた一日も、記録するときには、ひとつの流れを形作らざるを得ない。そのためには、流れを断ち切る体験は、その流れの外に置かれることが必要になってくる。それだけが時間とは無関

係に、たとえば「かむ」というひとつの行為として取り出されることによって、一日の体験は流れを保ち得るのである。

こうして、流れを断ち切る程のショック体験は、一日の流れとしての記録からは締め出されてしまう。こうした体験は、それだけが改めて焦点化され続け、日常を脅かす程の力を持ち始めるか、あるいは、より強固な意味をもつ日常へと完全に統合され、もはやとるにたらない体験として、時の流れの彼方に置き去りにされてしまうか、おそらくはそのいずれかの道をたどることになるのであろう。あるいは、時の経過と共に、前者から後者へと、徐々にその位置づけが変わってくるとも考えられよう。

ここでの私の体験は、それが生きられているさ中にあっては、前者として位置づいており、そのことは、たび重なるショック体験によって日常の連続性が切り刻まれ、保育者としてのアイデンティティが「危機」に瀕していたことを物語っている。

3. 意味を求めて

このようにして立ち現れた「危機」に対して、私になし得たのは、現在の状況を新たな視点から把え直すことであった。視点の転換が関係の意味を変え、それが関係そのものを動かしていくことに、私は気づき始めたのである。「私がこうして悩んでいるときには、共に生きている子どももまた、その子なりのし方で悩み苦しんでいるのだろう」と記録に残した私は、その苦しみを「お互いにのりきるべき問題」として把え直した。それは、自己批判的な、自己の内側にのみ向う視点によって生じた「危機」を、Yと私の双方にとっての、成長の過程に生じる必然として把え直すことを意味した。

同時に、私は、Yから離れることによってではなく、身体を寄せ合い、心を寄せ合うことによって、新たな関係を開いていこうと決意する。このような私の決意は、私ひとりの力ではなく、他の保育者の肯定的なまなざし

に出会うことによって実現されていった。私は、Yと共に、他の保育者や子どもたちのいる空間へ出向いていくことによって、私自身が他者から受け入れられているのを感じ、Yとの関係を新たに生み出す力を与えられたのである。

だが、Yは、その空間（他の保育者や子どもたちがあそんでいる保育室や庭）で落ち着いて過ごすことは、ごく稀であった。Yは毎回、時には一日に何度も、保育室の壁にかけてある鍵を指さし、「あっ、あっ」と言って、私にドアを開けるよう要求した。一歩保育室を出ると隣にはナーサリールームと受付、地下には用務員室、母親の控え室、図書室、二階三階には事務室、会議室等、数多くの第二の扉があり、それはYの要求に応じて開けられるものばかりではない。それでも私は、日課のようになったYのこの散歩につきあうために、ためらいがちな気持ちを励まして保育室のドアを開け、あたふたとYの後を追いかけるのだった。

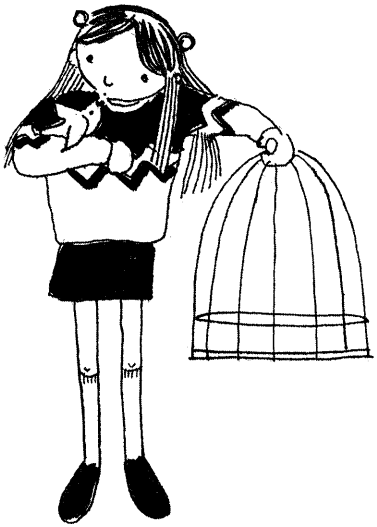
Yは必ず、ナーサリーや事務室、用務員室のドアを目指して、ケラケラと笑いながら走った。そうすれば私は、急いでYを追いかけ、力ずくでも抱きかかえて、Yが部屋に駆け込んでいくのを止めねばならない。Yはそれを知っていて、私に追いかけさせた。「まてまて」と私も笑いながらYを追いかけ、抱きとめ、連れ戻す。何くわぬ顔で歩き出し、また別のドアを目指すY。だが、Yの全身の抵抗にあい、肩や腕をかまれることもたびたびであった。繰り返されるYの挑発に、「またか」とため息をつきながら、追いかけずには済されない場所へと走るYを、私も追いかける他なかったのである。

保育室から一歩外に出ると、中で過ごしているときとは比べものにならない程の緊張感を味わう。外の世界では、私は「大人」として、秩序や規則を乱さない限りにおいてという条件のもとでしか、Yの要求に応じられなくなる。しかし、Yが求めたのは、まさに秩序を乱そうとすることであり、そうすることによって引きおこされる私の反応であった。それは明らかにわざと私を困らせようとする行為であった。私がうろたえ、必死になって

追いかけるそのことを、Yは、保育室の外で私に要求するのであった。このようなYを「受け入れる」とはどうすることなのか、私の問いが自己批判へと向ったことは、すでに述べた通りである。

しかし、私はやがてYのこの行為に、Yの抱える問題の根深さを見るようになった。Yは、他者の真険な反応によってしか、自分の存在価置、あるいは存在理由にさえも確信がもてないでいるかのように思われた。大人の秩序や希望に従うことを要求され、それがある程度できてしまったYは、自ら主体的に歩み出すためには、これほどまでに大人を支配し、困らせることが必要だったのではないか。

こうして私は、保育者としての私に立ち現れた「危機」が、Yの抱える問題とも無関係ではなかったことに気づかされたのである。



4. 自己受容に向けて

「危機」は、しかし、それを生き抜くことによって確かに克服されていった。「生き抜く」とは、今このようでしかない自分として、Yと共に生きることであった。それは、葛藤する自己を対象化し、自己を、矛盾する二つの極に揺れ動く存在として、自ら受け入れることを意味する。Yを受け入れられないと悩む私が、何よりもその自分を受け入れられないでいることに気づいたとき、子ども受容についての問いは、自己受容の問題へと行きついた。

その契機となったのは、私自身が、揺れ動き葛藤する心のままに、矛盾する行為を繰り返していることへの気づきだった。私は、Yの求めに応じてナーサリールームに忍び込んだかと思う間もなく、引きずり出すようにYを連れ戻す、ということを繰り返した。このとき矛盾する行為として表現されたのは、Yの要求に応じようとしてそうできずにいた、私自身の葛藤であった。自己の行為の内に葛藤を見る目は、Yの行為を、そのように行為せざるを得ないY自身の葛藤の表現として理解させる目を生じさせた。

このことは、先に述べたYの抱える問題の解釈と相俟って、私に、Yの痛みを感じさせずにはおかなかった。大人を支配し困らせているYの姿に、大人の秩序や希望に沿おうとして沿えない葛藤を見たのである。それは、Y自身にも制御できない程大きなものであるように思われた。それに気づいたとき、Yの葛藤と、私自身の葛藤とが重なり合った。

ここでの私の葛藤は、「大人」の秩序と「子ども」の要求の間に生きる「保育者」にとって、避けては通れない運命のように思われた。と同時に、保育者の葛藤は、子どもが、大人の秩序や希望に沿おうとしつつ、沿うことのできない生を生きていることをも物語っている。子どもが、自分にも制御できない葛藤を、保育者との関係に支えられて表現し、保育者との対決を通して克服しようとするほど、保育者自身の葛藤も大きくなる。それを

非受容として自己批判することから、「危機」は立ち現れたのであった。

だが、保育者が葛藤するということは、子どもの葛藤を、それを理解する以前に、すでに共に生きていることを意味している。それは確かに重い時ではあるけれども、そこでじっくりと時間をかけ、その時に持ち堪えたとき、大人と子ども双方に共通の新しい世界が開けてくる。葛藤を共に生きることによって子どもの今を支え、希望を失わないことによって子どもの未来を支えることが、保育者として生きることになるのではないだろうか。そのために、保育者には、葛藤する自己を受容しながら、希望をもってそれに持ち堪え得る自我の強さが必要とされているのだろう。

この重い時を生き抜く力となるのは、自己と他者に、肯定的な解釈を生み出すことであった。関係の「危機」を生きるときにも、新たな意味を創造し続けることによって、その関係は変容させていくことができるのである。

（筑波大学附属盲学校幼稚部）

訂正

八月号「グリム童話と三人のグリム兄弟」に誤りがありました。

p48 meinen → meinem

p51 「ねずみの木」→「ねず（杜松）の木」

幼児の教育　第八十六巻（昭和六十二年）総目録

○1号

創造性　滝口　俊子
子どもの世界を共に生きること　津守　真
SF的読み解き　子どもという風景　堀内　守
第21回　砂の幻想
自然とのふれあい（その2）　斎藤　芳子
飛び立とうとする子らと　牛山佐智恵
子どもの遊び（その8）
E・A・A・フェルメール　浜口順子訳
兎園随筆26
出会い（その二）——光る砂漠——　蕪木　寿江
倉橋惣三の演劇教育論（2）　富田　博之
若いお母さんたちへ　はるにれの会　菊池　慶子

○2号

子どもを育て、自分を育てる　小川　剛
35色のパレット　いま、母親への熱いメッセージ
理解の共同性　津守　真
いろいろなことを教えてくれる子どもた

ち（12）　村石　京子
仮り園舎から新園舎への引越　赤羽美代子
SF的読み解き　子どもという風景
第22回　CMと広告　堀内　守
女・子どもの「江戸」（その一）　本田　和子
ある保育の実践から　朴　香俄
若いお母さんたちへ　はるにれの会　榎田二三子

○3号
再び「子どもの世界を共に生きること」　津守　真
SF的読み解き　子どもという風景
第23回　会話の文末　堀内　守
女・子どもの「江戸」（その二）　本田　和子
兎園随筆
出会い（その三）　蕪木　寿江
TOKYO　アークヒルズと幼稚園　編集部
わたりあう関係　森下みさ子
「すみかとしての幼稚園」　永倉みゆき
若いお母さんたちへ　ある日のこと　はるにれの会　木村磨理子

○4号
「幼稚園真諦」を読む　その1
――「幼稚園教育の在り方」と対応させて――　津守　真
SF的読み解き　子どもという風景
第24回　待っている姿勢　堀内　守
兎園随筆
出会い（その四）　蕪木　寿江
私の見た中国　子どもたち　近藤伊津子
再び保育の中の小さなこと、大切なこと（4）　守永　英子
「塔の小公子」たち　―シェイクスピアと絵画―　村上　健
若いお母さんたちへ　帰国して三度目の春に　はるにれの会　塚田幸子

○5号
「幼稚園真諦」を読む　その2
――「幼稚園教育の在り方」と対応させて――　津守　真
SF的読み書き　子どもという風景
第25回　異世界からの通信　堀内　守
自然とのふれあい（その5）　斎藤　芳子
迷いどき（1）　向山　陽子
兎園随筆
出会い（その五）　蕪木　寿江
自分のものへのこだわり　牛山佐智恵
附幼村どぜう騒動記　永倉みゆき
若いお母さんたちへ　はるにれの会

○6号
「幼稚園真諦」を読む　その3
――「幼稚園教育の在り方」と対応させて――　津守　真
SF的読み解き　子どもという風景
第26回　「正」の万華鏡　堀内　守
すべては「私」にかえる　田村　玲子
兎園随筆
出会い（その6）　蕪木　寿江

母と子の情景「ママみてて」　矢埼　淳子
ふくろうのつぶやき――間がないね――　真壁　伍郎
女・子どもの「江戸」（その三）　本田　和子
若いお母さんたちへ　「文字」を覚える
前に脹むもの　はるにれの会　入江　礼子

○7号
イコンを求めて　牛島　義友
変化　津守　真
SF的読み解き　子どもという風景
第27回　時の流れ　堀内　守
回顧　川埼　千束
「光と影」　土橋　光子
ふくろうのつぶやき　真壁　伍郎
おばあちゃんに出会う　上垣内伸子
ひとりで遊ぶとき、一緒に遊ぶとき　牛山佐智恵
若いお母さんたちへ　この頃　はるにれの会　向山　陽子

○8号
ひとりひとりの子どもと「いま」を生きる　津守　真
SF的読み解き　子どもという風景
第28回　なぶることの広がり　堀内　守
緑蔭図書紹介
「ねずみ女房」　森下みさ子
「子どもの本の世界大会」の記録を読む　中村　悦子
「河童が覗いたヨーロッパ」その他　早川　好江
「人間のやさしさ強さ」その他　村石　京子
「サンペイ・ベルジュンパ・ラギ」　近藤伊津子
「グリム童話」と三人のグリム兄弟　美谷島いく子
シンガポールを訪れて　小沢　誉子
若いお母さんたちへ　おしゃべりに耳をかたむけて　はるにれの会　宮里　暁美

○9号
自我を育てる――発達の動力を生み出す保育――　津守　真
SF的読み解き　子どもという風景
第29回　気の宇宙へ　堀内　守
重兼　芳子「闇を照らす足音―岩下壮一と神山復生病院物語」（春秋社）を読む　中村　弓子
ふくろうのつぶやき　全体が見えるかね　真壁　伍郎
ゆうびんやさん　おとしもの　国吉　栄
兎園随筆　手、その他　蕪木　寿江
子どもの会話（その1）　無藤　隆
「錦の中の仙女」　近藤伊津子
若いお母さんたちへ　「友だち」ってすばらしい　はるにれの会　川上　美子

○10号
ある日―行為の中のある真実を考える　津守　真
SF的読み解き　子どもという風景
第30回　「ちょっと」の構造

ふくろうのつぶやき　――多くではなく、深く――　堀内　守
子どもの会話（その2）　真壁　伍郎
子どもたちのこと　無藤　隆
娘と自転車で考える　大橋理恵子
若いお母さんたちへ　姉妹のかかわり　上村　英明
はるにれの会　榎田二三子
1才六ヶ月児健康診断経過観察における遊びグループ指導の展開
上河内伸子、山埼　聡子、古屋喜美代、市川奈緒子

○11号
ヨーロッパ会議、教育・文化プロジェクト「就学前教育」を読む　津守　真
SF的読み解き　子どもという風景　堀内　守
第31回　こわさと身体
ふくろうのつぶやき　――ことばはおしみおしみ――　真壁　伍郎
子どもの会話（その3）　無藤　隆
子ども理解と内的時間意識
榎沢　良彦
あるインコの話　桜井　敬子
おしっこ、おもらし、そしてお弁当　牛山佐智恵

○12号
子どもが成長する一日　津守　真
SF的読み解き　子どもという風景　堀内　守
第32回　悲しの現象学
ふくろうのつぶやき――人生も一つのストーリー――　真壁　伍郎
クリスマスと子ども　関　史子
中国のむかし話　「王子アーツゥと青稞のたね」　近藤伊津子
子どもの会話（その4）　無藤　隆
保育における受容の問題　山手法子
幼児の教育　第86巻（昭和62年）総目録

＊　＊

ある年の始め、友人と正月気分で占いをしてもらいました。私は11月生まれですので、その時28才になったばかりでした。

ところが、私の生年月日を聞いたその占いのオジさんは言ったのです。

「今年30才ですね」

一瞬、何のことだかわかりませんでした。私は28才、という強い信念がありましたので、何を言っているんだろう、とさえ思ったのですが、気がつきました。つまり、「かぞえの30」だったのです。そして理解した後はショックが襲ってきました。「そうか、かぞえでいうと、もう30才なのか」

曽祖母が生きていたころは、「かぞえの○才」という表現をよく使いました。が、現在はほとんど死語に等しくなっています。

以前は、年があける＝年をとる、ということでした。「年の変わり」というのが今より重要な意味をもっていたわけです。それだけに、年末は家中で大掃除にかかり、清め、お正月を迎えました。

今では「年の変わり」とは単なるカレンダー上の意味しかもちません。おせち料理を作る家も少なくなり、大掃除をするよりも、家中でスキーに行ったり、ホテルに泊まったり、という家が増えました。

しかし、私個人は年をとるにつれて「年が変わる」という「切りかえ」のようなものが好きになってきました。別に神道を信じているわけではありませんが、神社で「今年もよい年でありますように」手をあわせて厳粛な気持になるのも悪くないな、と思うのです。

だから、最近は自然に思います。というよりあの時のショックがまだ尾をひいているのかもしれませんが、年末になると「また、年をとるんだな」

今年も終わり。また年をとります。

幼児の教育　第八十六巻　第十二号
十二月号　©　定価　四〇〇円
昭和六十二年十一月二十五日　印刷
昭和六十二年十二月　一　日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本　田　和　子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九―一九六四〇番
⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

保育が楽しくなる

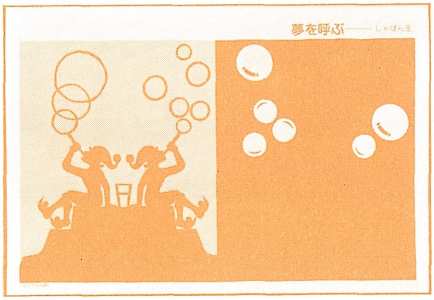
四季の切り紙

絵で見てすぐに教えられる切り紙指導の入門書

安達佑子著

やさしい切り紙の入門書。身近な四季折り折りの草花や動物などを多数収録。
折り方の名称、切り紙の歴史、指導の手引なども併記。

B5判・128頁・定価1,600円

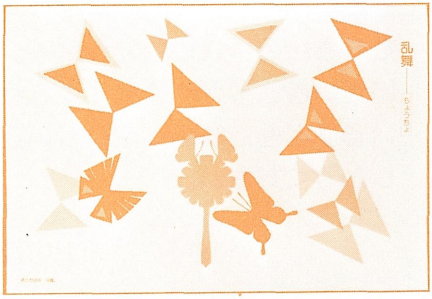


内容

四季を切る
- ●さくら
- ●チューリップ
- ●ちょうちょ
- ●こいのぼり
- ●しゃぼん玉
- ●あじさい
- ●海
- ●花火
- ●赤とんぼ
- ●クリスマス
- ●雪
- ●ひなまつり

折り方とその作品
各折り方の説明とその作品

資料編
切り紙の歴史と生活とのつながり
折った角度・面の数　　多角形のつくり方
指導の実際



くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

いきいき保育術

コーナーのない コーナーの保育

塩川寿平・京極寿満子　編著　塩川寿々子　写真

コーナーっていったい何だろう？
大人のおしきせのコーナーではない、
子ども自らがつくりだすコーナーを
たくさんの写真で紹介します。
いきいきと遊び、考え、くふうして
いる子どもたちのすばらしい姿を楽
しんでください。

〈内容〉

- 動物大好き
- つくるって大好き
- 外に出よう、自然にふれよう
- 登る、とぶ、わたる、ぶらさがる
- 家づくり
- 紙と遊ぶ
- 午睡を楽しく　他

Ｂ５判　128頁　定価1,400円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

D
2-A